

Children Crossing Borders : CCB を考える  
—子どもにとって日本語は母語か第二言語か継承語か—

川上 郁雄

1. (スライド番号、以下同じ)「移動する子どもたち」の時代

現代は「国際移民の時代」(Castles & Miller, 1993)とも呼ばれております。人々は富を、安全を、夢と希望を求めて、移動を繰り返し、地球の南北を、また東西を、動き回っています。

その陰に、大人とともに移動する子どもたちが多数生まれています。ある子どもは二言語を、またある子どもは三言語を使う家庭に生まれ、幼少の頃から、海を越えて移動を繰り返すケースも少なくありません。

2.

これからの子どもたちの日本語教育は、これまで、「母語教育」「継承語教育」「第二言語教育」「外国語教育」と区別されてきました。

しかし、いずれも言語教育ですが、それらの区別がつきにくい状況が生まれています。

3.

少し、例をあげてみましょう。

昨年(2008年)、シドニーで会った4人の高校生、さゆり、ジェニー、ミカ、キムの話します。名前はいずれも、仮名です。

さゆりは東京で生まれ、中学校まで東京で育ちました。中学を卒業する前に、突然、父親がオーストラリアへ移住すると言い出し、一家はシドニーにやってきました。

ジェニーは、オーストラリア生まれですが、小さいときに、オーストラリア人の両親とともに、父親の仕事の関係で来日し、その後、10年以上、日本で生活した。日本では公立小学校へ通い、日本人の子どもたちとともに中学まで過ごしました。そのため、日本語能力は普通の日本人高校生と変わらず、よく話します。

ミカは日本生まれの日本人ですが、小さいときに両親とともにイギリスに行き、平日はロンドンの現地校、土曜日は日本人補習校へ通っていました。中学生になって、1年ほど日本に帰り、インターナショナル・スクールに通いましたが、すぐに家族でシドニーに移ってきました。

男の子のキムは、在日コリアン三世で、中学まで日本で育ちましたが、英語を学びたいと思い、単身でシドニーにやってきました。私が会ったときは、4人はまだオーストラリアに来て、1年以内でした。

4.

これらの子どもたちは、オーストラリアでは、バックグラウンドスピーカーと呼ばれ、学校では「外国語としての日本語」(LOTE)を学ぶ子どもたちとみられていますが、これらの子どもたちにとって、日本語は、母語か、第二言語か、継承語か、外国語なのでしょう。このような「移動する子どもたち」(Children Crossing Borders : CCB)の日本語教育を、どのように捉えたらよいのでしょうか。これが、今回の発表のテーマであります。

5.

このような現象は、シドニーに限ったことではありません。「移動する子どもたち」は世界中にいます。

たとえば、『アメリカで育つ日本の子どもたち—バイリンガルの光と影』(佐藤郡衛他編、2008)の中で、片岡裕子さんは「アメリカには日本国籍、アメリカ国籍、二重国籍の子ども、日系アメリカ人や国際結婚家庭の子どもなど、多様な「日本人」の子どもがいる」ということを報告しています。さらに片岡さんは、「日本国籍を持たなくても自分は「日本人」だと思っている日系の子どももいる」と述べ、「日本の子ども」とは誰かという定義の見直しを提起しています。

6.

同じ本の中で、佐藤郡衛さんは、これらの多様な子どもたちを「第三の文化」をもつ子ども(third culture kids)と捉えることを提起し、「混濁的なアイデンティティをもつ「新しい」日本人」を支える枠組みの構想を指摘しています。

7.

この「第三の文化」をもつ子ども(third culture kid、以下TCK)という言い方や議論は、アメリカでは1950年代からありました。TCKとは「成長期の重要な時期を親の文化の外で過ごした人である」(Pollock & Van Reken、1999)とされています。

これらの子どもたちがなぜ注目されたかと言えば、アメリカ人の外交官やビジネスマン、軍隊や宗教に関わる者など、特権のあるエリート層がアメリカから世界中に出て行き、その子どもたちがアメリカ以外の文化圏でアメリカとは異なる文化に触れながら育ち、アメリカ本土で育つ子どもたちと異なる様子を示すことが注目され、研究されたからです。

8.

そのような研究の中で、TCKが自分を取り囲む主流文化に対してどのような関係を形成するかについて、以下の4つのタイプが示されています。

外国人型 外見も考え方も、異なるタイプ	隠れ移民型 外見は似ているが、考え方が異なるタイプ
養子型 外見は異なるが、考え方は似ているタイプ	鏡型 外見も考え方も同じタイプ

図1. TCKと自分を取り囲む主流文化との関係性：4つのタイプ

9、10、11、12、13

このタイプ分けは、TCKが移住先の社会の主流文化とどのような関係性を築いていくかを示しています。外国人型は外見も心情面（考え方や自己認識等）もホスト社会の多数派と異なるタイプであり、養子型は、たとえば外見の面ではホスト社会の多数派と異なるが、その社会に長く生活しているので心情面がその多数派と似ているようなタイプです。日本の場合で言えば、前者はニューカマーの「外国人」の子どもで、後者は在日生活が長い「外国人」の二世などがそれに当てはまると思います。

一方、隠れ移民型は、ホスト社会の多数派と身体的な特徴は似ているが、心情面ではその多数派とは異なるタイプであり、鏡型は、外見も心情面も、ホスト社会の多数派と同じタイプの人です。日本の場合で言えば、前者はアジア系外国人や日系人の子どもで、後者は日本で長く生活している、それらの子どもたちが考えられるでしょうか。

このように具体的に考えてみるとわかるように、このようなタイプ分けは机上のことであって、実際にそのようなタイプの人が実在するかどうかは、また別のことであることがわかります。

14、

このタイプ分けで重要なのは、実は目の前の子どもを見て、タイプ分けすることではありません。すでに指摘されていることですが、一人の子どもがひとつのタイプに固定されるものではなく、成長の途上で、また場面や人との関係性によって、周りが子どもを見る目が変わったり、子ども自身も社会の中の自分の姿を見る目が変わるものです。なぜなら、子ども自身が常に「移動」しつつ成長しており、社会から見た自分、自分から見た社会の関係は、常に変化するからです。つまり、子どもが成長する中で、あるタイプからあるタイプへ移行したり、また場面や人との関係性によって、あるタイプからあるタイプへ戻ったりするのが、現実の姿であると考えられます。この点をまず、確認しておきたいと思います。

15、そのうえで、このタイプ分けの議論からわかるように、TCK研究の主眼は常に子どもアイデンティティ形成や、主流文化に対する態度形成、文化的対応に関心があるということです。このような動態性のアイデンティティ論こそ、TCK研究の中心テーマであるとも言えよう。

15、16、ここまできますと、TCK研究の対象に動態性があり、捉え方がけっして固定的なものではないことがわかると思います。したがって、現在は、TCKとは「親に随伴して他の社会へ行く子ども」というシンプルな定義になっています。

ここで改めて浮き彫りになるのは、「他の社会へ行く」という「移動」の概念です。

17、私は、TCKのような子どもたちを「移動する子どもたち」と前から呼んでいます。

その意味は、ふたつ、あります。

「移動する子どもたち」は、

ひとつは、空間的に移動する子どもたち、

もうひとつは、家庭内では母語を、また家庭外ではホスト社会の言語を話すなど、言語間を日々移動している子どもたち、という意味です。

18、では、ここで、私が日本、オーストラリア、タイなどで会った「移動する子どもたち」(CCB)の調査を踏まえて、どのような子どもたちがいるのかを少し、分類してみたいとおもいます。

19、20、 図 紹介

以上のことから、何がわかるのでしょうか。

ここには、いわゆる日本国籍をもっている日本人から、日本以外の国籍を持つ「外国人」、また国籍レベルとは別に、幼少期の経験、使用する複数言語などから、多様なバリエーション、あるいはグラデーションがあることがわかると思います。

これらのバリエーション、あるいはグラデーションが生まれる原因は、「移動」です。さらに重要なのは、「移動」によって、一人の子どものカテゴリーが変わる、言い換えれば、子どもはどのカテゴリーにも「移動」することができるという点です。

たとえば、海外から日本にきた子どもは、日本ではJSL児童生徒と呼ばれますが、その子どもがいったん祖国に帰国すると、「その国のふつうの子ども」になったり、あるいは、他国へ「移動」し、英語を第二言語として学ぶと「ESL生徒」と呼ばれたりします。冒頭でご紹介した、シドニーの高校生は、まさにその例です。しかし、いずれも、日本語を第一言語か第二言語かは別としても、日本語話者の子どもという点で共通しています。

このように、移動する子どもは、その国や社会の示すカテゴリー間を「移動する」子どもであります。

21、したがって、先に述べた「移動する子ども」の定義に、あらたな、項目を加えたいと思います。

空間的に移動する。

言語間を移動する。

カテゴリー間を移動する。

22、先に述べたように、アメリカに育つ日本の子どもたちという議論や研究において、佐藤郡衛さんは、TCK という視点を導入し、「混雑的なアイデンティティをもつ「新しい」日本人」を支える枠組みを構想しなければならないと述べましたが、そのように「日本人」を再構築することは、「移動する子どもたち」の言語教育を考えると、ほとんど役に立たないことがわかります。

では、このように定義される「移動する子ども」という概念は、日本語教育において何を意味するのでしょうか。

それは、日本語話者あるいは日本語学習者は「移動する存在」であるということ、つまり、動態性があるということを提起します。また、学習者の「動態性」は、教育実践の動態性を必然的にもたらすことを提起します。

つまり、CCB はこれまでの言語教育のカテゴリー、たとえば、母語教育、第二言語教育、継承語教育、外国語教育といったカテゴリーを無効にします。

23、結論です。

CCB は、これまでの言語教育のカテゴリー（母語教育、第二言語教育、継承語教育、外国語教育など）を無効にする。

新しい「日本人」の定義は CCB に役立たない。

「CCB の言語教育」をどう構築するかが重要な課題

↓

今後の方向性としては、動態性のある子どもにとって必要な「ことばの力」を育成する言語教育とはどのような教育かを考えることが課題となります。それは、大人の考えるカテゴリーに合う言語教育というよりは、まさに子どもの主体性を育成する視点で教育実践が構想されなければならないことを意味します。

したがって、21 世紀の年少者日本語教育の方向性は、学習者の主体性と動態性を生かした「主体性の年少者日本語教育」であり、「動態性の年少者日本語教育」であるということです。